

自死の記憶を伴う再生型事例

大門正幸

A Case of the Reincarnation Type Involving Memories of Committing Suicide

OHKADO Masayuki

This article reports a case of the reincarnation type (CORT) occurring in contemporary Japan. It contains major features of CORT as reported in the literature, such as statements, behaviors, emotions, preferences, and skills related to the past-life personality. One notable feature of the present case is that the subject has memories of committing suicide in his past-life and of what happened after his death, that is, life-between-life memories: He entered the "reflection room," a dark room for the dead who regrets what he or she has done while alive. Another interesting feature is that the subject has three close friends who share with him the similar (or same) life-between-life memories: they had been together in the life-between-life state and had promised one another to be together when they were born. Furthermore, the two of the three children also had memories of entering the "reflection room" after they died and the description of the room they gave is virtually the same. Because of these features, the author believes that the present case will provide an invaluable piece of information about what could happen after one commits suicide.

Keywords: past-life memories, life-between-life memories, suicide, cases of the reincarnation type, reflection room

1. はじめに

日常的には特定の宗教とは縁遠い生活を送っている人も、自死遺族となった時に、先立った身内の魂が救われない状態で苦しんでいるのではないかという思いにとらわれ、苦悩する場合が少なくない。これは、自死を否定的なものとしてとらえることの多い宗教的教義に無意識のうちに影響を受けている場合も多いであろう。

たとえば、キリスト教においては『聖書』に自死を咎める記述はないものの、聖アウグスティヌス(354-430)による、自死は自らを殺すことであるから「汝殺すことなかれ」とする第6の戒律を破るものであるとする宣言、693年のトレド教会会議における「自死を試みたものは破門とする」という決定などを経て、自死を許されないものとする見解が一般

的となった (Heath & Klimo, 2006, pp. 33-34)¹。イスラム教においては『クルアーン』の4章29節を根拠に、自死は神によって禁じられたものであると考えるのが一般的なようである²。仏教においても、原始仏教の時代から自死を否定的にとらえる見方が基本であった (西元, 1962)。特に我が国の死生観に大きな影響を与えた源信僧都による『往生要集』では、自死を選んだものが地獄に落ちるとされる描写があり³、その思想的影響は現代にも及ぶ。

宗教上の教義という観点から離れて、経験科学の枠組みにおける調査研究の対象とされている再生型事例に目を向けると、自死の過去生記憶を持つ事例はいくつも報告されており、その意味で、自死を選んだものの魂が永遠に救われないということはなさそうである。

世界各国から収集された再生型事例に基づいて構築されたバージニア大学医学部知覚研究所の再生型事例データベース (2017年8月29日版) によれば、表1に示すように、死因に関するデータの記録されている1,892例 (総事例数は2,246) のうち、自死が占める数は41例 (2.2%) である⁴。

表1 再生型事例データベースに見られる過去生での死因

死因	事例数
射殺 (意図的)	208 (11.0%)
射殺 (非意図的)	22 (1.2%)
刺殺	80 (4.2%)
溺死	111 (5.9%)
蛇咬傷	35 (1.8%)
その他の意図的な横死	231 (12.2%)
その他の非意図的な横死	489 (25.8%)
自死	41 (2.2%)
医学的合併症	4 (0.2%)
自然死 (病死を含む)	671 (35.5%)
合計	1892

中間生記憶については、2つの事例 (事例番号 000270 と 256865) が保持していたと記録

¹ ショウペンハウエルは、聖職者たちが何の聖書の根拠もなくそのように主張していると批判している (ショウペンハウエル, 1952, p. 74)。

² (Khalifa, 2000, p. 76) では、該当部分は "Murder, Suicide, and Illicit Gains Prohibited" と訳されている。また、*THE QURAN: Online Translation and Commentary* では "And do not kill yourselves" という訳の後に "That is, do not destroy yourselves by consuming wealth acquired through illegitimate means, such as usury, gambling, fraud, theft, bribery, usurpation and so on; or it means, do not commit suicide, or murder, or do not expose yourselves recklessly to mortal danger" という解説が付けられている。一方、井筒 (1957, p. 114) は該当部分 (三十三[二十九]) を「またお互いに殺しあってはならぬ」と訳しているが、これは標準的な解釈ではないようである。

³ 『往生要集』の黒縄地獄に関する記述。ただし、浅田他 (2012) が明らかにしたように、この箇所は「自死したものが地獄に落ちる」という一般に受け入れられてきた解釈は正確ではない可能性が高い。

⁴ Stevenson (2001, pp. 219-220) の執筆時の数値は29であった。

されているが、その詳細についてはデータベースからは不明である⁵。

James Matlock は、公にされている 9 つの報告と自身が調査した 1 つの報告の合計 10 事例を分析し、自死を伴う事例が(i) パターンとしては一般的な再生型事例と変わらないこと、(ii) 過去生での死から再生までの期間が短い傾向があること、(iii) 同一家族または過去生で近しかった人物のもとに生まれ変わる傾向にあることを指摘しているが、過去生での死後の様子については何も触れていない (Haraldsson & Matlock, 2016, pp. 246-253) ⁶。

本稿では、過去生での死後の出来事についての記憶を伴う再生型事例について報告するが、前述のように自死事例における中間生記憶に関する報告の乏しさを考慮すると、大変貴重な事例であると言える⁷。

2. 事例の概略

本事例の中心人物は関東圏に在住のカズヤ君 (2004 年生まれ) である。筆者がカズヤ君について知ったのは、映画『かみさまとのかくそく』 (荻久保監督, 2013) を通してである。この作品の中で、9 才のカズヤ君は過去生記憶および中間生記憶について語っている。カズヤ君の祖母であるミドリさんと 2 度、カズヤ君本人と 1 度、Skype を通して話をした後、2016 年 2 月 13 日にカズヤ君、母親のイズミさん、祖母のミドリさんと面談をした。また同じ日に、カズヤ君と共通する記憶を持つマサトシ君 (2002 年生まれ)、ハルカさん (2004 年生まれ)、ソウシ君 (2008 年生まれ) およびその母親のトウコさんにも話を聞いた。なお、マサトシ君とハルカさんはカズヤ君と一緒に映画に出演している。ミドリさんはご自身の著書の中でカズヤ君の事例について記しており (南山, 2014)、その記述も資料とした。また、前述の映画のために収録された未編集のインタビュー映像を、関係者のご厚意で視聴することができたので、その記録も資料として用いた。また、2016 年の 10 月に、本事例と深く関わる 2 名の女性、ミコトさん、トモミさん、及び、カズヤ君に対して電話でインタビューを行った (9 節)。2 人からは、さらに、2017 年の 4 月 2 日に横浜で開催された日本たいわ協会設立祝賀会の会場において本事例の関係者全員と会い、内容について必要な確認を行った。

3. 過去生の人物

カズヤ君が記憶していた過去生の人物は 1975 年 9 月 21 日にミドリさんと最初の夫との

⁵ データベースでの中間生記憶の欠落は、必ずしも記憶そのものの欠落を意味しない。面談調査において中間生記憶に関する質問が常になされたとは限らないため、記憶そのものは有していたものの記録されなかった事例も多いのではないかと推察される。

⁶ 分析対象となっているのは、Paulo Lorenz 氏の事例および Marta Lorenz 氏の事例 (Stevenson, 1974)、Cemil Fahrıcı 氏の事例および Navalkishore Yadev 氏の事例、(Stevenson, 1997)、Faaruq Andary 氏の事例 (Stevenson, 1980)、Rajani Singh 氏の事例 (Pasricha, 2008)、Rolf Wolf 氏の事例 (Hassler, 2013)、Jacira Silva 氏の事例 (Andrade, 2010)、Wael Kiwan 氏の事例 (Haraldsson & Matlock, 2016)、そして Matlock 氏自身が調査した Cruz Moscinski 氏の事例である。

⁷ 本事例については異なる形で Ohkado (2016) でも報告している。

間に生まれたジュンさんである。ジュンさんの前に兄のマコトさんが生まれている (1973 年 3 月 11 日)。ジュンさんが 1 歳を過ぎてから離婚をしたため、同居をしていたミドリさんの両親 (ジュンさんの祖父母) が兄のマコトさんとジュンさんの養育に協力することになった。特にジュンさんは祖母に懐いていた。後にミドリさんは再婚し、1980 年 2 月 1 日に長女のイズミさんが誕生した。

ジュンさんは、5 歳の時にてんかんの発作で倒れ、それ以来、亡くなる 1 年ほど前まで薬の服用を必要とするようになった。

1997 年⁸、21 歳の時、イズミさんの友人が暴走族グループとトラブルになるという出来事があった。妹の友人を助けたジュンさんは、逆恨みをされて暴行を受け、それ以来、嫌がらせをされるようになった。ジュンさんの幼馴染で、ある不良グループに所属していた人物が、暴走族との中を仲裁すると言ってつきまとい出し、ジュンさんと不良グループの付き合いが始まった。ジュンさんも家族も関係を断とうと努力を重ねたが、うまくいかない日が続いた。

1997 年 12 月 19 日、今日こそ関係を断つと宣言して家を出たジュンさんであったが、その日の午後、縁を切る手助けをすると申し出ていた幼馴染とは別の人物から、ミドリさんの元に電話がかかってくる。交渉は不首尾に終わったとの報告に憤慨したミドリさんは、その人物を通して、その場に一緒にいたジュンさんに対し、すぐに自分の所に来るようにと伝えた。この時、ミドリさんは職業訓練校に通っていた。

電話の後しばらくして、しぶしぶやって来たジュンさんに対し、ミドリさんは激しい叱責を浴びせた。耐えられなくなったジュンさんは、逃げるようにしてその場を立ち去った。

その日の深夜、ミドリさんの元に警察から電話があった。ジュンさんが高速道路の高架から飛び降りたとの報告。死亡推定時刻は午後 11 時 45 分であった。

4. 意識の死後存続を示唆する出来事

死者による生者との交信の試みであると解釈できる事例は、枚挙にいとまがない⁹。本事例でもそのような出来事が見られる。

ジュンさんの他界後、ミドリさんは激しい自責の念に駆られ、「ジュンに謝りたい！もう一度ジュンに逢いたい。願いが叶うのなら悪魔に魂を売り渡してもいい」と思うほどであった。

ジュンさんが亡くなった 7 日後、嵐の夜であったが、11 時をだいぶ過ぎた頃、雨風の音に混ざって玄関の戸を激しく叩く音が聞こえた。飼っていた犬がミドリさんのベッドの下に駆け込み、怯えたように身を震わせた。

「ジュンが帰ってきた！」

そう直感したミドリさんは思わずこう口走ってしまった。

⁸ ジュンさんの自死に至る経緯についての詳細は、南山 (2014, pp. 112-118) に記されている。

⁹ たとえば、筆者が調査したカノン君の事例とタカトキ君の事例においても同様の現象が見られた (大門, 2016、Ohkado, 2017)。

「ジュン、帰りなさい。ここはあなたのいる場所じゃないの。」

するとミドリさんの言葉に応えるかのように戸を叩く音はやんだ。

「あれほど逢いたかったジュンに何故そんなふうに言ってしまったのか、今でも分からない」とミドリさんは言う。

この出来事の後、ミドリさんは、「一度自分が断ち切ってしまったジュンさんとの絆を再び自分が絶ってしまった」という後悔の念に苛まれるようになった。

ジュンさんの死後、半年経った頃、ジュンさんが毎晩夢に出てきて、ミドリさんに訴えるようになった。

「ママ、あの人たちを許さなきゃダメだよ。誰も悪くないんだ。」

「絶対許せない！」

そう答えるミドリさんを諭すように、ジュンさんはこう語った。

「人も自分も責めるのをやめて、許さなきゃダメなんだ。ママがそんなふうには悲しんでいると、僕も光の所に行けないんだ。だからもう誰も責めないで。」

ジュンさんとのこのようなやり取りがどれくらい続いたのか、ミドリさんは覚えていないが、夢でのジュンさんとの邂逅がミドリさんの気持ちを次第に和らげていった。

5. 発言とふるまい

カズヤ君は、2004年4月8日に、ミドリさんの長女（ジュンさんの妹）イズミさんの元に誕生した。体重は1,198グラム、予定日より50日早い出産だったためすぐに新生児集中治療管理室（NICU）に入れられた。50日後に退院となったが、定期検診のほかにも体が弱くてたびたび通院する必要があった。1歳の時には停留睪丸の手術を受けた。退院した時からカズヤ君とイズミさんは、ミドリさんの元で暮らすようになった。ミドリさんとイズミさんに、カズヤ君とジュンさんの繋がりを感じさせた、カズヤ君の発言・振る舞いを表2に挙げる。

表2 ジュンさんを思わせるカズヤ君の発言・振る舞い

項目	年齢	内容
1	8ヶ月	2004年12月19日、11時45分頃（ジュンさんの命日、死亡推定時刻）、激しくなき出し、2階のジュンさんの部屋に連れて行けと命じるかのような仕草をする。連れて行くと泣き止み、笑顔を見せた（家族全員が確認をしている）。
2	1歳	泣いてばかりいることが多かったが、ジュンさんが小学2年生の時に描いた『スーホの白い馬』の一場面の絵を見せると、絵を認識したかのように泣き止んだ。
3	9ヶ月から2歳まで	ジュンさんが祖父に対してしたように、曾祖父に対して、非常に愛情深い様子を見せる。入院していた曾祖父が亡くなるまで病院を訪れるたびに、ベッドに潜り込んだり、

		図1に見られるように、曾祖父の顔を拭いたりした。
4	1歳から2歳まで	曾祖父を「お父さん」と呼ぶ。(ジュンさんも祖父を「お父さん」と呼んでいた。)
5	1歳から11歳まで	ジュンさんが祖母に対してしたように、曾祖母に対して、非常に愛情深い様子を見せる。図2は、曾祖母の誕生日を祝うカズヤ君。
6	1歳から11歳まで	曾祖母を「お母さん」と呼ぶ。(ジュンさんも祖母を「お母さん」と呼んでいた。)
7	1歳から現在まで	ミドリさんを「ママ」と呼ぶ。(イズミさんが「ばあばでしょう。ママは私」と言う。「ママはカジュのママだ!ばあばじゃない。」と抗議をした。)
8	1歳から現在まで	母親を「いーちゃん」と呼ぶ。(ジュンさんも妹のイズミさんを「いーちゃん」と呼んでいた。)
9	2歳	ジュンさんの他界後、命日に挨拶に来ていたジュンさんの親友(女性)を見たカズヤ君は、ジュンさんしか呼ばない呼び方で女性の名前を呼んだ。
10	2歳	ぜんそくの発作が出た時に、ミドリさんに対して「苦しいよ。でも死なない。今度はちゃんと生きるよ」と発言。
11	3歳	「あなたはジュンなの?」というミドリさんの問いかけに対して「ママ(=ミドリさん)から生まれた時はジュンだったけど、今はカジュ。カジュだよ」と返答。
12	5歳	ジュンさんがそうしていたように、自分の服用する薬を薬箱に入れてきちんと整理していた。
13	9歳	「病気で死んでもよかったんだけど、早く死ぬことにしたんだ。あの時には病気と向き合えなかったから、今向き合っているんだ」と発言。
14	11歳	2016年2月、曾祖母の葬儀の後、遺骨の入った骨壺を持つと主張し、火葬場から家に帰るまで持ち続ける。「前に果たせなかった約束をやっと果たせた」と発言。(ジュンさんが元気な頃、祖母に「お母さんが歩けなくなったら僕がおぶってあげるね」と語っていた。ジュンさんが亡くなった後で祖母は「約束をしたのに…そのことが心残りだ」と度々言っていた。カズヤ君の発言は、「その約束をやっと果たせた」という意味である。)



図1 入院する曾祖父の顔を吹くカズヤ君（2006年1月）。



図2 曾祖母の誕生日を祝うカズヤ君（2009年3月8日）。

ミドリさんにとっては、表1の項目11が、カズヤ君がジュンさんの生まれ変わりであると確信させる決定的な出来事であった。カズヤ君の誕生以来、ジュンさんの生まれ変わりだという確信に近い気持ちを抱き続けていたミドリさんが、とうとう本人に問いかけてしまった時のやり取りである。「ママ(=ミドリさん)から生まれた時はジュンだったけど、今はカジュ。カジュだよ」という返事に、ミドリさんは、生まれ変わりを確信すると同時に、カズヤ君はジュンさんとは別の人間なのだから同じように扱ってはいけない、という戒めの気持ちを持つようになった。

一方、イズミさんは、カズヤ君を出産した時から「赤ん坊の姿をしているけれど大人だ。おじさんの魂が入っているみたい」という気持ちを抱いており、兄のジュンさんが生まれ変わってきたのでは、という思いは漠然と抱いていた。そんなイズミさんにとって、項目9が決定的な出来事であった。カズヤ君が知るはずもない呼び名で女性に声をかけた様子を見て、女性は驚き、涙を流した。その場にいたイズミさんもミドリさんも、泣くのをこらえることができなかった。項目11の出来事があった時にはイズミさんもその場にいたが、「やはりあなたはジュンなの？」と問いかけるミドリさんに対して、既に生まれ変わりを確信していたイズミさんは、口には出さなかったものの、「そんなのとっくの昔に分かってるじゃない」と思っていたとのことである。

面談時にはカズヤ君(11歳)は項目14を除いて、詳しいことは記憶していなかったもので、報告はミドリさんとイズミさんの記憶に基づいたものである。しかし、面談の時点でも、カズヤ君は、次節で述べる、ジュンさんとしての生を終えた後の記憶はまだ有していた。

6. 中間生記憶

映画『かみさまとのかみさん』の中で、カズヤ君は自死した後の記憶について語っている(荻久保監督,2013)が、カズヤ君が面談時に語った内容もほぼ同じであった。南山(2014, pp.126-134)にカズヤ君へのインタビューが記されているので、そこから引用しておこう¹⁰。

[死んだ後は]カズの記憶では"その時、自分だった心"が空の上に行く時に、反省部屋に行くかどうか考えるんだ。魂はまだ体に残っていて、色んなところにあって全部わかっているんだ。魂はみんなつながっているから。

死んだらみんな反省するけど、反省部屋に行かない人もいて、その人は次に死んだ時に、その時反省部屋に行かなかったことも一緒に反省する。自分がしたことを考えるんだ。たくさん反省して、どうしたらいいのかを考える。(生きている間に)悪いことをしちゃった人に、今度は何をして喜ばせるかを(どんなおみやげをもっていか)考えるんだ。[.....]反省をして気持ちを考えて、これで良かったんだって思えるようになると戻れるんだよ。明るい所に。その繰り返しをするんだ。[.....]

[暗い所の様子は]真っ暗で何も視えない。悪いことをした人が刑務所に入るでしょ。

¹⁰ 原文で多用されている改行は適宜省いてある。

その暗い場所みたいな感じ。反省をする所。静かにして、じっとしてみていると、うすく透けていくように、他の人の存在？ 魂がいるのも感じたけど、動くと思えなくなるよ。[.....]

自分がどう思うか。という気持ちが一番大事なんだとわかったんだ。そこへは自分(の意思)で行くのではなく「あーあーしまったな」って思った瞬間に真っ暗になってしまったんだ。光がなくなってしまうんだ。[.....]

[反省した内容は] 自分で死んだら絶対ダメって。中学生の時に原付に乗っちゃったことも反省した。反省することはいっぱいあった。反省しなくちゃいけないことが増えると、光が減ってどんどん暗くなっていく。反省すると光が戻って、明るくなる。もう絶対しないと思うんだ。[.....]

心のモヤモヤが生まれるとそこに行くみたい。僕は行ったことがないけれど、反省しない人はもっともっと暗くなって、どんどん怖くなって、じーっとみても何も見えなくなっていくって、独りぼっちになるみたい。同じ空間？場所にいるからわかるんだ。音も聴こえてくるしね。でもそこには行きたくないし、知ろうとしない。怖いから行ってみようと思わないんだ。そして、反省すると明るい所に戻る・・・それを繰り返すの。[.....]

自死以外でも、反省しなければならないことがある人はみんな反省部屋に行くんだ。[殺されてしまった人は] 殺された理由を反省するんだ。生きていた時に反省をすることがあれば、それも反省する。[.....]

[殺した人は] もちろん、すごく真っ暗なところに行くよ。どんな理由でも人を殺したら絶対にいけないんだ。自分でいっぱい反省するんだよ。殺しちゃダメだっていっぱい反省するの。[.....]

[自死とそれ以外の理由で亡くなった人の違いは] 死んだ時の理由にもよるけど、自分を殺しちゃうんだから(自分で自分に与える)罪が重いよ。それに死んじゃったせいで(遺された家族等)に苦しむ人が増えるでしょう、自分で死んじゃった人は、反省をする大きな理由が1つ増えるよ。もう繰り返してはいけないと心に誓うまで反省するんだ。うんでくれた親に許してもらえないとダメなんだ。遺してきた人たちを悲しませるのは辛くて悲しい、そう思ってちゃんと反省しないと、ずっと自死をするんだよ！繰り返すんだ¹¹。だからもう絶対に繰り返さないように反省するの。そして今度は、命を大切にするように誓うんだ。

僕の場合は、今まで自分がしてきたことをいっぱい反省した。今度は自分も人も大切にしようと思ったから、また生まれて来られたんだ。生まれて来ただけで充分なんだ。

¹¹ Ian Stevenson 博士は、過去生での自死の記憶を持つ調査対象者のうちの(i) 3人は、自死はしなかったものの、子供時代に不満を感じると「自死する」と親を脅し、(ii) 一人は実際に中年期に自死で亡くなった、が、(iii) 一人は「過去生で自死した記憶があるので、自死は選ばない」と語った、と報告している (Stevenson, 2000, pp. 220)。

それだけで親孝行なんだよ。それから心も体も、自分も人も、全部大切にしないと
いけないんだ。愛が一番大事だよ。みんな大切な命なんだ。

また、ミドリさんによれば、3歳のカズヤ君を朝比奈切通しに連れて行った時に「ここ、
ここ。お空からこの場所を見ていたんだよ」と語っている。さらに、「ここには前に来たこ
とがある」とも述べたが、実際、朝比奈切通しはジュンさんも何度も足を運んだ場所であ
った。この部分は、過去生記憶と解釈すべきかも知れない。なお、カズヤ君は5歳の時も
同様の発言をしている。

7. 中間生での約束

カズヤ君の事例で興味深いのは、カズヤ君以外に筆者が面談した三人の子ども(マサト
シ君、ハルカさん、ソウシ君)が中間生でカズヤ君と一緒に居て、生まれたら家族になろう
ね、と約束してきた、と語っている点である。ミドリさんも、三人の子ども達の母親のト
ウコさんも正確な日時は記憶していないものの、カズヤ君が3人と出会ったのは2008年、
カズヤ君が4歳の時であった。セラピストであるミドリさんが主催した講座にトウコさん
は子ども達と一緒に参加をした。マサトシ君はカズヤ君と意気投合をして、仲良く一緒に
遊んだが、お迎えのときに嬉々とした表情で「生まれて来たら家族になろうってやくそく
してきたんだよ」とカズヤ君に語りかけた。この言葉にカズヤ君もハルカさんも同意す
るかのように頷いた。面談時にも、子供達はいずれも、「お空で(他の3人と)一緒だった」
と語っている。

ミドリさん、イズミさん、トウコさんによれば、カズヤ君と3人は兄弟以上に仲が良く、
「お空で『一緒になろうね』と約束をして生まれてくるというのはこういうことなのか」
と感慨深く思うとのことである。筆者も6時間ほどの時間を両家族と一緒に過ごしたが、
4人の子ども達が固い絆で結ばれていることを強く実感した。

また、3人のうちの二人、マサトシ君とハルカさんは、カズヤ君と類似の「反省部屋」の
記憶を持っていた¹²。映画『かみさまとのやくそく』の中で、ハルカさんはこの時の記憶に
ついて、概略、次のような内容を語っている。

自分はかつてモンゴルの遊牧民のような生活をしていた。とても我儘な女性で、家が
経済的に苦しい状態にあるにもかかわらず、家族のことを顧みないで自分の衣服や装
飾品にお金を使うような生活だった。自分が死んだ時に身近な人達が「死んでくれて
良かった」と話しているのを見て、悲しくなって反省部屋に入った。今度の人生では
まず人、特に母親に、お土産を渡しにきた。(=喜ばせにきた)。

¹² カズヤ君は、ジュンさんとは別の過去生を記憶しており、そこではソウシ君と一緒にだったとい
う。この記憶については、ソウシ君も共有しているが、内容について検証不可能であるため、こ
こでは取り上げない。

映画の中でのマサトシ君もカズヤ君やハルカさんと同様に反省部屋の話をしているが、過去生記憶については語っていない。筆者との面談時には、はっきりとした記憶ではないが、海岸で銃を持って寂しそうに佇んでいるイメージ、銃弾で足を撃たれた感覚を覚えていて戦争を通して行った行為を悔やんで反省部屋に入ったのかも知れない、と語った。なお、図3に示すように、マサトシ君の右脚には該当箇所に母斑がある¹³。



図3 マサトシ君の母斑

中間生記憶について、映画の中においても、面談時においても、子供たちが強調しているのは、(i)反省部屋には自分の意思で入るものであり、誰かに強制されるわけではないこと、(ii) 自死をした人だけが入るのではないこと、(iii) やり直そうと思ったらまた生まれ変わってやり直せること、(iv) 過去生で傷つけた人と出会える環境に生まれ変わった場合にはその人を、そうでない場合には同じ境遇にあるような人を幸せにしようと生まれてくる、という点である。

7. 母斑

過去生記憶を持つ子どもの多くは、過去生で被った傷や損傷などに対応する母斑や先天

¹³ 母斑については次節を参照。

性欠損を伴うことが少なくない¹⁴。カズヤ君には左腕に 5 センチほどの楕円形の母斑があるが、ミドリさんによれば、ジュンさんが 18 歳か 19 歳の時にバイクのマフラーに触れてしまった時に出来た火傷の痕と対応しているとのことである。

8. 嗜好・技能

再生事例においては、過去生記憶を持つ子どもが、過去生の人物が示した嗜好と共通する嗜好を示したり、過去生で身につけた技能を生まれながらに持っている場合も多い。ジュンさんは BB 弾（エアソフトガン）が趣味で銃の種類にも大変詳しくあったが、カズヤ君も BB 弾に対する思い入れは深く、イズミさんによれば、「小さい時から、どこでそんな知識を得たの、とびっくりするくらいに BB 弾に詳しく、兄からの引き継ぎとしか思えない」とのことである。図 4 は BB 弾で遊ぶカズヤ君、図 5 はカズヤ君のコレクションである。



図 4 BB 弾で遊ぶカズヤ君

¹⁴ Stevenson (1997) では、200 を超える事例が報告されている。



図5 カズヤ君のBB弾コレクション

また、ジュンさんはバスケットボールが得意で高校時代から週に1、2度、自分が通った小学校にコーチとして教えに行っていた。カズヤ君は、特に練習をしたわけでもないのにバスケットボールが得意で、小学校の同級生からは「習ってもいないのに、どうしてそんなにバスケができるの？」と何度も言われたとのことである。

9. 再会

1994年、ジュンさんがバスケットボールを教えていた小学生の中に、ミコトさんとトモミさんという6年生の双子がいた。周りの大人たちと違って自分たちを個人として認め、真剣に相談にのってくれたジュンさんに、二人は憧れの気持ちを持っていたが、特にトモミさんの想いは強く、ジュンさんと撮った写真をお守りとして持ち歩いていたほどであった。卒業後の1997年、母親からジュンさんの死について聞かされた二人は、当然のことながら非常に大きなショックを受けた。トモミさんのジュンさんへの想いは変わらず、2001年、19歳になるまで、ジュンさんとの写真は持ち続けていた。当時、二人はジュンさんの母親であるミドリさんのことは知らなかった¹⁵。一方、ミドリさんは、自分の母親（ジュンさんの祖母）が二人の母親と同じ職場で働いていたこともあって、二人の存在は知っていた。

2016年7月17日、その2日前に男の子を出産したミコトさんが、「ウエルカムセッショ

¹⁵ ミドリさんによれば、子供会のイベントで会ったことがあるとのことであるが、二人の記憶には残らなかった。

ン」という、病院から出産時に贈られるお祝いセッションを受けた。そのセッションの担当者は、カウンセラーでセラピストでもあるミドリさんであった。その時に渡された名刺を見た時に、ミコトさんは、ミドリさんが、小学校の時に憧れていたジュンさんの母親であることを知り、自分とジュンさんとの関わりについて話をした。驚いたミドリさんも、ジュンさんがカズヤ君として生まれ変わってきているとしか思えない、という話をした。

2016年9月17日、ミコトさんが所有している農場に、ミドリさんがカズヤ君を連れていった。カズヤ君と出会った時のことを、ミコトさんは、次のように語っている。

ミドリさんから、カズヤ君がジュンさんの生まれ変わりだ、という話を聞いていたけれど、そんなことはとても信じられませんでした。実際に会った時も、ジュンさんとはとても背が高かったけれど、カズヤ君はまだ小学生で・・・二人は全然違って。でもその後、話をして、近くでカズヤ君の目を見た時、「ああ、知ってる目だ！」って気持ちになって、感情が溢れてきて、目を見ていることができなくなって。ああ、やっぱりジュンさんなんだ、と思いました。

一方、カズヤ君は「ミコトさんに会った時、『はじめまして』って言われたけど、会うのははじめてじゃないと思ったので、そうは言わなかった。詳しくは思い出せなかったけれど、とても良く知ってる人だと思った」と語っている。

その5日後の2016年9月22日、ミコトさんの農場で行われた収穫祭には、ミドリさんとカズヤ君だけでなく、トモミさんも参加した。カズヤ君と会った時の印象を、トモミさんは次のように述べている。

カズヤ君を最初に見た時、とってもよく知っている人だと思いました。ジュンさんの生まれ変わりだ、と聞いていたからかも知れません。でも、なんだかとっても不思議な気持ちでした。出会った後、とっても不思議なことをしてしまいました。10月14日に、カズヤ君の学校がある街に行く用事があったんです。それで、カズヤ君の学校に行って、カズヤ君と会って、連絡先を渡してきたんです。私はアーティストで、一匹狼みたいなのところがあって、普通は人に住所を教えたりしないんですが、この時は、なんとしてもカズヤ君と繋がっていきゃいけない、という気になったんです。

この出来事について、カズヤ君は次のように語っている。

親戚でもない、知らない女の人が会いに来ている、って先生たちが大騒ぎしていて、僕が部屋(応接室)に入って行った時も色々質問していたみたいだけど、僕が来たら先生たちは黙っちゃって、とってもおかしかった。トモミさんと話するのはとっても自然な感じがした。

ミコトさんとトモミさんについて特筆すべき点は、二人とも実際に再生型事例が存在するとは考えてもいなかったことで、それだけに、二人がカズヤ君をジュンさんの生まれ変わりだと感じたことは大きな意味を持つ。

9. 結語

管理された実験において、故人に関する、本人が知らないはずの情報を入手可能であることを示しているという意味で信頼できる霊媒は、自死した者が地獄に落ちるということはないと断言している (Anderson, 2000, Chapter 6; Dubois, 2006, Chapter 7)。死者からのメッセージを関係者に届けに行く「魂のメッセンジャー」としての活動を行なっている元福島大学教授の飯田史彦氏は、自死した男性からのメッセージをその妻に伝える場面で、以下のように、自らの意思で「反省の闇」に入ると述べている (飯田, 2005, p. 213)。

ご主人は、生前に奥様を大切にできなかったことや、自分勝手な自殺をしてしまったことに対して、たいへん深い罪悪感を抱いていらっしゃるんです。そこで、大いに反省するために、死後すぐに、自らの意思で、「反省の闇」に入られたんですよ。ですから、ご主人が、自分を許せるようになって、「反省の闇」から出る自信がつくためには、まず何よりも、奥様のお許しが必要なんです。

「反省の闇」については、次のように説明されている (ibid., 214-215)。

自殺なさった方が入る「反省の闇」っていうのは、そういう真っ暗闇の部屋や場所が実際に存在するわけじゃなくて、自分自身を闇で覆ってしまうという意味なんです。自殺なさった方は、死後すぐに、取り返しのつかないことをしてしまった自分を猛反省して、あまりの情けなさに、「自分はもう、光の姿に戻る資格など無い」とか、「こんな自分では、ほかの光たちに会うのが恥ずかしい」などと思って、まるで人間が、恥ずかしい時に顔を隠すように、自分を真っ暗闇で覆ってしまうんですよ。

また、「反省の闇」は、自らの意識で作上げた闇なので、罪悪感や後悔の念が無くなれば無くなる、という (ibid., 216)。

奥様がご主人のことを許して差し上げたら、その瞬間に、ご主人は深い罪悪感と後悔の念を手放すことができ、魂として、光としての自尊心を取り戻せるので、ものの、まぶしく輝く光の姿に戻ることができるんです。そのことを、我々の世界では、俗に、「成仏する」などと表現しているんですよ・・・「成仏する」というのは、亡くなったご本人が、終えたばかりの人生で犯した罪に対する罪悪感や後悔を手放し「まぶしく輝く光」としての自尊心を取り戻す、という意味なんです。

飯田氏による解説は、子ども達が語る反省部屋の記述と共通する部分が多く、驚かされるばかりである。本稿で紹介した事例は、再生型事例としての一般的な傾向を多く持つ、数少ない日本の事例という点で貴重であるが、再生型事例以外の分野で報告されている、自死者が体験する世界と共通する内容が語られている、という点でも大変貴重である。霊媒またはチャネラーが語る情報に基づいて描かれた自死後の世界に関する情報をセラピーに利用しようとする試みは Heath & Klimo (2006) で提案されているが、そこでは再生型事例は考察の対象とされていない。本稿で紹介した事例は、自死に関する情報源のひとつとして、自死に関心を持つ全ての人にとって有益な情報源となるのではないかと思う。

謝辞

本研究は中部大学倫理審査委員会の承認を受けて実施したものです（課題名：出生前記憶を語る子どもの実態に関する研究 承認番号：260100）。本研究の一部は中部大学の特別研究費 (29IL206A) および Helene Reeder Memorial Fund for Research into Life After Death の援助を受けて行なったものです。南山みどりさんと本文でお名前を挙げた調査協力者の皆様、研究のきっかけを与えてくださった池川明博士、インタビュー動画の視聴を許可してくださった荻久保則男監督、本事例に関して貴重な助言をくださった James Matlock 博士、再生型事例データベースの利用を許可してくださったバージニア大学医学部知覚研究所および所長の Jim Tucker 博士に深く感謝申し上げます。

参考文献

- Andrade, Hernani G. (2010) *Reborn for Love: A Case Suggestive of Reincarnation*. London: Roundtable.
- Dubois, Allison (2006) *We Are Their Heaven: Why the Dead Never Leave Us*. New York: Simon & Schuster.
- Haraldsson, Erlendur and James G. Matlock (2016) *I Saw a Light and Came Here: Children's Experiences of Reincarnation*. Hove: White Crow Books.
- Hassler, Dieter (2013) "A New European Case of the Reincarnation Type," *Journal of the Society for Psychical Research*, 77, 19-31.
- Heath, Pamela Rae & John Klimo (2006) *Suicide: What Really Happens in the Afterlife? Channeled Conversations with the Dead*. Berkeley, CA: North Atlantic Books.
- Khalifa, Rashad (2000) *Quran: The Final Testament, Authorized English Version Translated from the Original*. CA: Universal Unity.
- 飯田史彦 (2005) 『生きがいの創造 II』 東京：PHP 研究所.

- 井筒俊彦 (1957) 『コーラン (上)』 東京：岩波書店.
- 南山みどり (2014) 『ママが「いいよ」 って言ってくれたから、生まれてこれたんだよ』 東京：ぜんにちパブリッシング.
- 西元宗助 (1962) 「仏教と自殺」『京都府立大学学術報告』 14, pp. 59-67.
- 萩久保則男監督 (2013) 『かみさまのやくそく ～胎内記憶を語る子どもたち～』 (映画) 東京：熊猫堂.
- Ohkado, Masayuki (2016) "A Same-Family Case of the Reincarnation Type in Japan," *Journal of Scientific Exploration*, 30(4), 524-536.
- 大門正幸 (2016) 「同一家族内における生まれ変わり型事例」『人体科学』 25(1), 3-12.
- Ohkado, Masayuki (2017) "Same-Family Cases of the Reincarnation Type in Japan," *Journal of Scientific Exploration*, 31(4), 555-575.
- Pasricha, Satwant K. (2008) *Can the Mind Survive Death? Vol. 2: Reincarnation and Other Anomalous Experiences*. New Delhi: Harman Publishing House.
- ショウペンハウエル／斎藤信治訳 (1952) 『自殺について、他 4 編』 東京：岩波文庫.
- Stevenson, Ian (1974) *Twenty Cases Suggestive of Reincarnation, 2nd Edition*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1980) *Cases of the Reincarnation Type. Vol. III: Twelve Cases in Lebanon and Turkey*. Charlottesville: University Press of Virginia.
- Stevenson, Ian (1997) *Reincarnation and Biology: A Contribution to the Etiology of Birthmarks and Birth Defects* (2 vols.). Westport, CT: Praeger.
- Stevenson, Ian (2001) *Children Who Remember Previous Lives: A Question of Reincarnation, Revised Edition*. Jefferson, NC: McFarland.
- THE QURAN: Online Translation and Commentary. <http://al-quran.info/#home> (2017 年 12 月 10 日接続)